

在米国沖縄関係資料調査収集活動報告

米国国立公文書館新館所蔵の映像・音声資料編

仲本 和彦⁺

はじめに

- 1 NARA資料群について
- 2 写真
 - 2-1 調査・収集
 - 2-2 利用
 - 2-3 今後の課題
- 3 動画フィルム・音声テープ
 - 3-1 調査・収集
 - 3-2 利用
 - 3-3 今後の課題
- 4 地図・空中写真
 - 4-1 調査・収集
 - 4-2 利用
 - 4-3 今後の課題

おわりに

はじめに

本稿は、アメリカにある沖縄関係資料に関する「資料地図」作成の一環として、これまでの活動の成果や課題をまとめたものである。

本誌前号（2006年3月）において、米国国立公文書館（National Archives and Records Administration、以下NARA）の新館（以下、Archives II）が所蔵する沖縄関係資料のうち、文書資料（textual records）の調査状況について報告した。¹ 本稿では、同じくArchives IIが所蔵する資料のうち、写真、動画フィルム・音声テープ、空中写真・図面といった映像・音声資料（non-textual records）の調査・収集状況について報告する。

アメリカにある沖縄関係の映像・音声資料は、大田昌秀著『これが沖縄戦だ 写真記録』（琉球新報社、1977年）や1フィート運動の会²によるドキュメンタリー・フィルム『沖縄戦 未来への証言』（1989年）などによって、1970年代後半から紹介され始めた。戦争における「敗者の宿命」とでも言えるであろうか、沖縄戦当時に日本側が撮った映像は残っていないため、これら写真やフィルムの発見に対する反響はたいへん大きかった。戦争体

⁺ なかもとかずひこ 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部公文書専門員

¹ 拙稿「在米国沖縄関係資料調査収集活動報告（ ）：米国国立公文書館新館所蔵沖縄関係文書リスト」『沖縄県公文書館研究紀要』第8号（2006年3月）、1～25頁。

² 1983年に始まった市民運動で、NARAが所蔵する沖縄戦の動画フィルムを市民一人当たり100円のカンパで1フィートずつ買い集めるといったもの。正式名称を「子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会」という。本稿では一般的に知られている「1フィート運動の会」を用いることにする。

験者が少なくなって沖縄戦についての記憶の風化が嘆かれる中、戦争を体験した人々にとっては自らの記憶を蘇らせることになり、戦争を体験していない人々にとっては写真やフィルムを通して戦争を追体験することになった。

このような新しい歴史資料に対する人々の関心の高まりを受け、1990年代に入ると、沖縄県公文書館の新設や沖縄県平和祈念資料館の移転改築とも相まって、沖縄県が主体となってこれらの資料を集めるようになった。しかし、規模的には1フィート運動以上のものであったにもかかわらず、基礎調査を伴わなかったため、何が集められ、何がまだなのかといった確認がなされず、機関同士で重複が生じたり、いつまでたっても全体像が見えてこなかったりといった欠点があった。そこで沖縄県公文書館では、2003年に国立国会図書館と共同での琉球列島米国民政府文書(USCAR文書)の収集が一段落したのを機に、文書だけでなく映像・音声資料の体系的な調査・収集にも取り組むことになった。沖縄関係の映像・音声資料をすべて洗い出そうという試みである。全国的に見ても同じような取り組みはなく、画期的なプロジェクトであった。³

1 NARA資料群について

NARAは、ワシントンD.C.にある本館(Archives I)の他に、メリーランド州カレッジ・パークにある新館(Archives II)、大統領図書館(Presidential Libraries)、地域分館(Regional Archives)など全米に33の施設を持つ巨大な公文書館群である。写真やフィルムといった特殊媒体は、文書以上に保存環境を維持する必要があって、ごく一部を除いては最新設備を擁するArchives IIで集約的に管理されている。

Archives IIの閲覧室は、2階が文書閲覧室(Textual Records)、3階が地図・設計図閲覧室(Cartographic and Architectural Records)、4階が動画・音声・ビデオ閲覧室(Motion Picture, Sound, and Video)、5階がスチール写真閲覧室(Still Picture)と、媒体毎に分けられている。それぞれの媒体で書庫の温湿度設定、目録の作り方、管理の仕方などが異なるので、特殊な知識や技能を持ったスタッフや作業場が必要なためであろう。

NARAでの資料管理についてはすでにいろいろなところで紹介されてきているので、ご存知の読者も多いだろうが、映像・音声資料の場合も文書資料同様に、米連邦政府の組織や機能を軸にした階層構造になっている。下に示したように、まず、階層の最上位には「記録群(Record Group、以下RG)」があって、その下に「シリーズ(Record Series)」と呼ばれる資料群があり、それぞれに「エントリー番号」という固有の番号が付けられている。

-RG xxx (記録群)

… …

-RG xxx (記録群)

-Entry xx (シリーズ)

-Entry xx (シリーズ)

-Sub-series (サブ・シリーズ)

-Sub-series (サブ・シリーズ)

… …

-Entry xx (シリーズ)

³ 文書については、1978年より東京の国立国会図書館が日本占領関係資料の収集事業を展開している。しかし、媒体を文書(textual records)に限定しているため、NARAが所蔵する日本関係の写真や動画フィルムは体系的に収集されていない。

例えば、国防問題全般を掌握する国防長官が作成・収受する公文書はRG330（国防長官室記録群）に集約され、管理される。また、国防長官の下にいる陸軍長官の文書はRG335（陸軍長官室記録群）、陸軍参謀長の文書はRG319（陸軍参謀本部記録群）といった具合に、同じ省であってもその機能や規模によって細分化される。現在、NARAにはRG1からRG573までの記録群があるが、表1で示したように、沖縄に関係する映像・音声資料は23の記録群で確認されている。

表1：沖縄関係映像・音声資料記録群一覧

No.	RG	記録群名
1	018	陸軍航空隊記録群
2	026	米国沿岸警備隊記録群
3	056	財務省一般記録群
4	077	陸軍工兵局長室記録群
5	080	海軍省一般記録群、1789～1947年
6	092	陸軍補給局長室記録群
7	094	陸軍高級副官部記録群、1780年代～1917年
8	107	陸軍長官室記録群
9	111	陸軍通信局長室記録群
10	112	陸軍軍医総監室記録群
11	127	米国海兵隊記録群
12	143	海軍補給及び經理局記録群
13	165	陸軍省参謀及び専門幕僚本部記録群
14	200	国立公文書館受贈コレクション
15	208	戦略情報局記録群
16	260	第2次世界大戦米国占領司令部記録群
17	306	米国情報局記録群
18	313	海軍作戦部隊記録群
19	319	陸軍参謀本部記録群
20	335	陸軍長官室記録群
21	342	米国空軍司令部、活動、組織記録群
22	373	国防謀報局記録群
23	428	海軍省一般記録群、1947年以降

2 写真

2-1 調査・収集

まず、写真の調査結果についての結論から言うと、表2にあるように、25のシリーズに沖縄関係写真の存在が確認できている。このうち、これまで写真集などで紹介されてきた写真は主に次の4つのシリーズが出所である。すなわち、陸軍はRG111-SCシリーズ、海軍はRG80-Gシリーズ、海兵隊がRG127-GWシリーズ、空軍⁴がRG342-FHシリーズである。

上記4つのシリーズのうち、RG111-SCとRG80-Gについては、最近では見られなくなったが、両者とも昔よく図書館などで使われていた4×5インチのカード・インデックスでカタログ化されている。カードがアルファベット順に並んでいて、「沖縄」、「爆撃」、「空中写真」などの地名や主題で検索できる。しかし、沖縄関係がどのようなキーワードの下にあるかはすべてのカードに目を通してみないと分からないため、沖縄県公文書館の調査においては、A～Zのすべてに目を通し、関連写真を洗い出すことにした。その結果、陸軍からは約7,000枚、海軍からは約7,700枚の写真を抽出し、それらのうち陸軍は約4,100枚、海軍は2,800枚を収集してある。

海兵隊のRG127-GWというシリーズは、「沖縄」、「硫黄島」など第2次世界大戦時の太平洋の20数ヶ所の戦闘地ごとに分類されていて関係写真を抽出しやすい。調査の結果、沖縄関係は約4,400枚あることが分かった。このシリーズの収集は完了している。

空軍については、1997年までワシントンD.C.にあるスミソニアン協会（Smithsonian Institution）の航空宇宙博物館（National Air and Space Museum）に保管されていたが、NARAに移管されることになり、RG342-FHというシリーズになった。ここでも海兵隊同様、主題別および地域別にまとめられているため、容易に沖縄関係を抽出できる。沖縄関係は約800枚で、これも収集は完了している。

⁴ 1947年9月に創設され、それ以前は陸軍航空隊（Army Air Force）の一部であった。

上記4シリーズ以外に特筆すべきは、RG260-CRという琉球列島米国民政府（United States Civil Administration of the Ryukyu Islands、以下USCAR）の広報局が残した写真資料である。大きささまざまな大きさの写真が無造作に箱に入れられていて、全体量の正確な把握は難しいが、サンプリングによる推計では少なくとも10万枚はある。「土地問題」、「高等弁務官」、「USCAR（民政）」などUSCARが独自に設けた主題ごとに分類されていて、現在までのところ1万枚余り収集してあるが、他の主題項目からの収集も進めていく必要がある。「琉球政府関係写真資料」として沖縄県公文書館が所蔵する約5万枚の写真とは「車の両輪」の関係にあり、アメリカ統治時代に沖縄に並存した2つの行政の営みをたどるには不可欠な資料である。

表2：沖縄関係写真のシリーズ一覧

RG	Entry	シリーズ名	量	収集 ⁵	公開 ⁶
026	G	沿岸警備隊写真、1886～1967年	56枚	完了	完了
080	G	海軍省一般写真、1900～58年	7700枚	一部	一部
111	CPF	陸軍通信局長室一般写真、カラー写真、1944～54年	50枚	未	未
111	CX	陸軍通信局長室写真、1954年以前+1955年以降（カラー）	845枚	完了	未
111	SC ⁷	陸軍通信局長室写真、1955～81年	600枚	一部	一部
111	SC	陸軍通信局長室写真、1941～54年	7000枚	一部	一部
111	SCA	陸軍通信局長室写真、地域別、第2次世界大戦	未調査	不要	-
111	SCA	陸軍通信局長室写真、地域別、第2次世界大戦及び以後	未調査	不要	-
111	SCA	陸軍通信局長室写真、主題別	未調査	不要	-
112	VT	陸軍軍医総監室ベトナム陸軍医局写真、1960～70年	未調査	不要	-
127	GG	海兵隊一般写真、1958～81年	未調査	不要	-
127	GR	海兵隊参照用写真、1940～58年	未調査	未	未
127	GW	第2次世界大戦中・戦後海兵隊写真、1939～58年	4400枚	完了	一部
127	N	海兵隊セントラル・ファイル写真、1871～1958年	未調査	未	未
208	A	陸軍情報局第2次世界大戦国内・国外関係写真、1942～45年	2枚	未	未
208	AA	陸軍情報局連合国・枢軸国関係写真、1942～45年	未調査	未	未
208	MNC	陸軍情報局、ニュース局、雑誌課写真、1942～45年	5枚	未	未
208	MO	陸軍情報局、米軍軍事行動関係写真、1942～45年	未調査	未	未
208	SX	陸軍情報局、国連サンフランシスコ国際機構会議関係写真、1945年4月21～27日	8枚	未	未
260	CR	琉球列島米国民政府の活動に関する写真、1957～72年	10万枚	一部	一部
260	CRA	琉球列島米国民政府の活動に関する写真、1946年4月1日～1965年6月30	未調査	未	未
306	ET	米国情報局アイゼンハワー大統領極東訪問関係写真	1枚	未	未
319	CE	米国および諸外国の空中写真、1942～64年	未調査	未	未
319	SF	陸軍諸活動写真、1940～66年	未調査	未	未
342	FH	米国防空軍司令部、活動、組織記録群写真	797枚	完了	完了

2-2 利用

収集した写真は、キャプションを翻訳してアルバムに綴り、図1のように沖縄県公文書館の閲覧室横の参考資料室に配架し、誰でも自由に手にとって見られるようにしてある。公開済みの写真アルバム・タイトルは以下のとおり。

⁵ 「不要」となっているものは、他シリーズとの重複が明白かあるいは沖縄住民との関連性が低い
ため沖縄県公文書館では収集しない方針としているもの。

⁶ 沖縄県公文書館での公開状況。以下、他の媒体でも同じ。

⁷ RG111-SCはいわば「マスター」シリーズになっていて、陸軍通信隊が撮った写真はすべてそこにファイルされている。その中からハイライト的な写真を抽出して主題や地域別にアルバムに綴ったものに、RG111-SCAというシリーズがある。

アルバム・タイトル
占領初期沖縄関係 陸軍
占領初期沖縄関係 海軍
米国陸軍通信隊
米国空軍 第二次世界大戦
米国海兵隊
米国沿岸警備隊
基地建設関連
USCAR土地関係
USCAR高等弁務官関係
USCAR広報局



図1：参考資料室に配架されている写真資料アルバム

また、沖縄県公文書館ホームページの「写真が語る沖縄」のコーナーに17,000枚近くの写真を掲載してあるので、インターネットに接続できる環境なら世界中どこからでも閲覧することができる。⁸

これらの写真については、沖縄県公文書館閲覧棟2階の閲覧室で申請し、手続きをして入手することができる。⁹ 費用は、複製にかかる実費のみで同館での手数料は一切かからない。

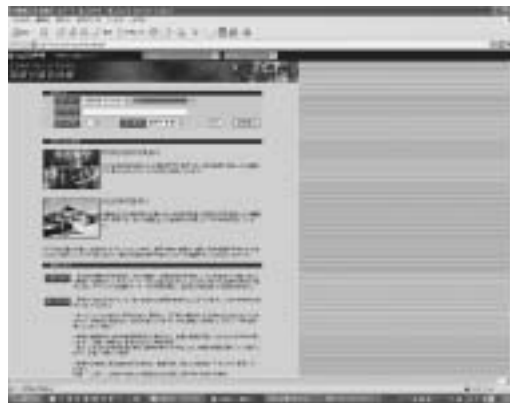


図2：沖縄県公文書館ホームページ（写真が語る沖縄）

2-3 今後の課題

上で説明したシリーズのうち、海軍と海兵隊については収集が完了しているが、陸軍のRG111-SCとUSCARのRG260-CRシリーズには未確認の写真がある。RG111-SCについては、先述した通りインデックスによる約7,000枚の沖縄関係写真の抽出は完了しているが、原物を閲覧しながら収集対象を確定しようとした時期と、NARAの特別整理期間¹⁰が重なってしまったため、ゼロックス・コピーによるイメージの収集¹¹が終わっていない。今後はイメージを収集し、その中に収集すべき写真がないか確認する必要がある。一方、RG260-CRについては、イメージの収集は完了しているが、まだ収集対象の絞り込みができていない。全体で10万枚を越える大きなシリーズなだけに、今後は年次計画を立てながら体系的に収集に取り組む必要がある。

3 動画フィルム・音声テープ

3-1 調査・収集

動画フィルムについては、NARAのホームページにあるARC (Archival Research Catalog) というデータベースで検索が可能である。¹² しかし、すべてのフィルムがデータベース化されているわけではなく、包括的に把握するためには写真の場合と同じように、

⁸ 沖縄県公文書館HP「写真が語る沖縄」(<http://www.archives.pref.okinawa.jp> 2007.1.9)。

⁹ これは、動画フィルムや図面なども同じだが、米陸海空軍など米連邦政府機関が作成した公文書には著作権が発生しないためである。

¹⁰ 保存箱の入れ替えのための閲覧停止期間。

¹¹ ゼロックス・コピーで写真とキャプションを複写し、収集しておく作業。

¹² NARAのHP「ARC」(<http://www.archives.gov/research/arc> 2007.1.9)。

カード・インデックスを丹念に見ていかなければならない。沖縄県公文書館の調査ではすべての記録群のインデックスに目を通し、沖縄関係のシーンを含むフィルムを抽出していった。その結果、約2,500巻の沖縄関係フィルムが確認できた。

沖縄戦に関するフィルムについては、これまでに1フィート運動の会、沖縄県平和祈念資料館、沖縄県公文書館が収集しており、その数はそれぞれおよそ200巻、260巻、120巻である。合計すると約580巻になるが、重複を除くとまだ約350巻にしかならないことが分かっている。カード・インデックスによる調査で沖縄戦関係が約1,000巻存在することが確認できているので、7割近くが未収集ということになる。また、戦後のフィルムについても1,500巻近くあり、これらは沖縄県公文書館が収集したUSCARフィルム100巻を除いてはほぼ手がつけられていない。

次に、シリーズごとの詳細を見てみる。沖縄に関する動画フィルムおよび音声テープは、表3に示したとおり、36のシリーズにその存在が確認できている。このうち、これまで沖縄県内で紹介されてきたフィルムは、主にRG18（陸軍航空隊記録群）、RG111（陸軍通信局長室記録群）、RG127（米国海兵隊記録群）、RG342（米国空軍司令部、活動、組織記録群）、RG428（海軍省一般記録群、1947年以降）である。例えば、白旗を持った少女が投降するあの有名なシーンは、RG111-ADCというシリーズに238巻ある沖縄関係フィルムのうちの1つであり、マラリアにかかり全身が激しく震えている少女に米兵が水筒で水を与えるシーンは、RG428-NPCというシリーズにある。

一方、音声テープは、現在確認できているだけで14巻と数が少ない上、動画フィルムと違ってそれを利用するには英語を聞き取る能力が必要など、一般県民が広く利用する機会も少ないと思われるため、これまでのところ手をつけていない。

表3：沖縄関係動画フィルム・音声テープのシリーズ一覧

RG	Entry	シリーズ名	量	収集 ¹³	公開
018	C	陸軍航空部隊動画フィルム、1944年	1巻	不要	-
018	CS	陸軍航空部隊動画フィルム、1945年	136巻	39巻	37巻
026	-	沿岸警備隊動画フィルム、1945年	1巻	不要	-
056	-	財務省動画フィルム、1945年	2巻	2巻	完了
080	MN	海軍省動画フィルム、1945年	10巻	不要	-
107	-	陸軍長官動画フィルム、1945年	11巻	8巻	-
111	ADC	通信局動画フィルム	238巻	14巻	完了
111	CAN	通信局動画フィルム	2巻	未	未
111	CB	通信局動画フィルム	17巻	2巻	完了
111	FB	通信局動画フィルム	4巻	不要	-
111	LC	通信局動画フィルム	349巻	1巻	完了
111	M	通信局動画フィルム	4巻	未	未
111	OF	通信局動画フィルム	2巻	不要	-
111	SFR	通信局動画フィルム	19巻	1巻	未
127	-	海兵隊動画フィルム	37巻	未	未
127	G	海兵隊動画フィルム、1961～63年	215巻	4巻	完了
127	MH	海兵隊動画フィルム、1946年	2巻	不要	-
127	R	海兵隊動画フィルム	383巻	20巻	完了
143	-	海軍補給・会計局動画フィルム、1945年	6巻	6巻	完了
200	G	寄贈動画フィルム、1945年	未調査	未	未
200	MN	寄贈動画フィルム、1961～62年	1巻	未	未

¹³ 「不要」となっているものは、1フィート運動の会または沖縄県平和祈念資料館がすでに収集しており、県内機関同士での重複を避ける意味で沖縄県公文書館では収集しない方針としているもの。

200	MT	寄贈動画フィルム、1952年	5巻	未	未
200	PN	寄贈動画フィルム、1945～50年	1巻	未	未
208	UN	陸軍情報局動画フィルム、1945年	12巻	8巻	完了
260	USCAR	琉球列島米国民政府広報局動画フィルム	391巻	100巻	完了
306	-	米国情報局動画フィルム、1958～72年	4巻	未	未
306	EN	米国情報局音声テープ	9巻	未	未
335	AH	陸軍長官室音声テープ、1958年	3巻	未	未
335	AHM	陸軍長官室音声テープ、1953年	1巻	未	未
335	AHT	陸軍長官室音声テープ	1巻	未	未
342	-	米国防空軍部隊活動及び組織動画フィルム	31巻	未	未
342	CAN	米国防空軍部隊活動及び組織動画フィルム	64巻	未	未
342	FR	米国防空軍部隊活動及び組織動画フィルム、1972年	2巻	不要	-
342	USAF	米国防空軍部隊活動及び組織動画フィルム、1951年	87巻	未	未
428	MH	海軍省動画フィルム、1945年	2巻	不要	-
428	NPC	海軍省動画フィルム、1945～47年	396巻	15巻	完了

3-2 利用

沖縄県公文書館では、収集したフィルムはすべてVHSに変換し、閲覧室のビデオ・ブースで閲覧できる。また、写真同様、沖縄県公文書館の契約業者を通じVHSかDVDのいずれかで複製を作ることにも可能である。さらに、平成18年度からは、図3にあるように、同館が所蔵する沖縄戦関係のフィルムから30巻を選んでホームページに搭載してある。¹⁴ 今やインターネットに接続できる環境なら世界中どこからでも映像の一部を閲覧できるようになっている。



図3：沖縄県公文書館ホームページ（沖縄戦関連映像資料）

3-3 今後の課題

沖縄関係の動画フィルムは全部で2,500巻あり、沖縄戦に限っても1,000巻あることが確認できているが、沖縄戦に関しては約7割、戦後のフィルムに関しては約9割以上が未収集である。これらのフィルムには、上空からの機銃掃射のシーンだけのものや地上での戦闘シーンの重複などもあり、必ずしもすべてが収集に値するものではないが、沖縄県内の機関や団体で収集すべきフィルムがまだ残っていることは間違いないだろう。

沖縄県公文書館は動画フィルムのカード・インデックスすべてに目を通し沖縄関係フィルムの抽出を行ったが、まだ中身の確認ができていないフィルムも多数ある。今後の調査では、それらフィルムを閲覧して、内容を記録にとどめ、できればサンプルも収集しておく必要がある。¹⁵

¹⁴ 沖縄県公文書館HP「沖縄戦関連映像資料」(<http://www.archives.pref.okinawa.jp> 2007.1.9)。

¹⁵ ただし、NARAが所蔵するフィルムがすべて閲覧できるわけではない。「閲覧用」としてのVHSあるいはオープン・リールが存在する場合としない場合があり、存在しない場合には閲覧用ビデオの作成を依頼しなければならない。ただし、ビデオが出来上がるまでに2～3ヶ月かかることもある。

4 地図・空中写真

4-1 調査・収集

写真や動画フィルムと違って、地図や空中写真の資料的価値が評価され始めたのはごく最近のことである。その理由は、図面類から得られる情報が、これまでアメリカでの調査を先導してきたいわゆる「研究者」の研究領域ではなかったことにある。しかし、沖縄県公文書館がアメリカに残る古い空中写真や地図も重要な歴史資料と捉えてその収集に取り組むようになってから、それらを使っての地籍の回復、史跡の復元、米軍基地に囲われてしまった先祖墓の確認などで、これらの資料に対する評価は次第に高まっていった。

表5に示したとおり、沖縄関係の地図や空中写真は11のシリーズで確認できている。その中で特筆すべきは、RG373 (国防諜報局) の空中写真とRG77 (陸軍工兵局長室) の陸軍地図サービスの地図、そしてRG313 (海軍作戦部隊) の第2次世界大戦潜水艦パトロール航行図の3シリーズである。

RG373の空中写真は、米軍が軍事作戦地図作成のために撮影した上空からの写真で、現在までのところ奄美諸島も含めた琉球列島に関するネガフィルムが170巻確認できている。そのうち沖縄戦が終結する1945年夏ごろまでの写真は約3,200枚ある。¹⁶ 軍事作戦用でより高い解像度が要求されたためだろうか、大きいものは1コマ(9 x 18インチ)もあり、NARAでの閲覧は図4のように専用の電光板を使って行う。米軍は日本軍から没収した地図などにこれらの空中写真から得られる情報を付加し、軍事作戦用の地図を作った。それが次に紹介するRG77の陸軍地図サービスというシリーズにある地図である。

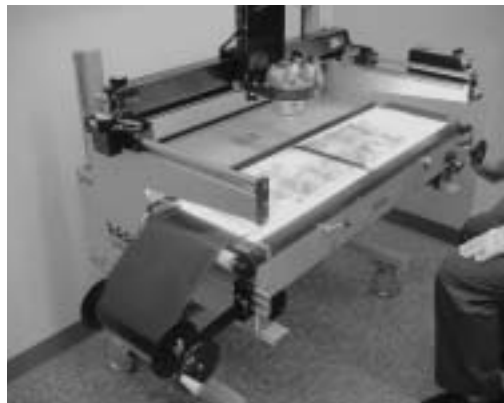


図4：NARAでの空中写真の閲覧風景

RG77の陸軍地図サービス (Army Map Service、以下AMS) の地図は、(財) 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室が刊行した『沖縄県史 資料編12 アイスバーグ作戦 沖縄戦5 (和訳編)』(沖縄県教育委員会、2001年)の口絵¹⁷や沖縄県公文書館の平成17年度特別展「公文書等の記録資料に見る沖縄戦～アイスバーグ作戦」で紹介されている。¹⁸

米軍は縮尺の違う地図を何種類も作り、新たな情報が得られるたびにそれらを改訂していった。現在までに沖縄関係が含まれていることが確認できている地図のタイプは表4の通りである。沖縄県公文書館は、そのうちAMS/L-791タイプをトランスパレンシー (transparency) というカラーシート (図5) とデジタルデータで収集した。¹⁹

¹⁶ 沖縄県公文書館がアメリカから収集した空中写真は次の出版物で紹介されている。(財) 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室による『沖縄県史ビジュアル版5 空から見た沖縄戦』(沖縄県教育委員会、2000年)、『沖縄県史ビジュアル版10 空から見た昔の沖縄』(同、2002年)、『沖縄県史ビジュアル版11 空から見た昔の沖縄II』(同、2003年)、『沖縄県史ビジュアル版13 空から見た昔の沖縄III』(同、2004年)。その他、調査・収集については、当山昌直「沖縄の古い空中写真に関する調査作業ノート」『史料編集室紀要』第26号 (沖縄県教育委員会、2001年) 241～244頁、源河葉子「沖縄戦に際し米軍が撮影した空中写真」『沖縄県公文書館研究紀要』第4号、第5号 (沖縄県公文書館、2002年、2003年) を参照のこと。

¹⁷ トマス・マーフィン (Thomas Murfin) 文書の中に含まれていたAMS/L-791 (縮尺5万分の1の地図)。

¹⁸ アイスバーグ作戦戦術用地図、縮尺2万5千分の1、Ie-Shima SW伊江島南西 (沖縄県公文書館資料コード0000061039)。

¹⁹ 沖縄県公文書館シリーズコード0000002871。類似の作戦地図は、沖縄県公文書館が所蔵するエドワード・フライマス (Edward Freimuth) コレクションや沖縄県地籍調査分室から引き継いだ「米軍作成沖縄地図」というシリーズにも含まれている。

表4：地図の種類と縮尺

地図タイプ	縮尺
AMS/L-091	2万5千分の1
AMS/L-093	5万分の1
AMS/L-096	1万分の1
AMS/L-691	10万分の1
AMS/L-791	5万分の1
AMS/L-891	2万5千分の1
AMS/L-893	4千8百分の1



図5：軍事作戦用地図（AMS/L-791タイプ）
（沖縄県公文書館資料コード0000010480）

RG313の第2次世界大戦潜水艦パトロール航行図53枚は、未公開だが戦時中に沖縄を発着した日本軍の輸送船や疎開船を攻撃した米潜水艦のパトロール航行路が記録されている貴重な資料である。沖縄近海の海上封鎖作戦に参加したすべての潜水艦が網羅されているわけではないが、米潜水艦が沖縄本島周辺や東シナ海、先島諸島周辺などを縦横無尽に航行していたことが分かる初めての資料である。

表5：沖縄関係図面のシリーズ一覧

RG	Entry	シリーズ名	量	収集	公開
018	-	通信隊長室航空課、航空防諜課長補佐資料、1942～44年	要調査	未	未
026	-	沿岸警備地区、1940～41年	要調査	未	未
077	-	陸軍地図サービス	1002枚	70枚	完了
092	-	補給局長室墓地所在地図	要調査	未	未
094	-	陸軍高級副官部	要調査	未	未
165	-	陸軍省一般・特別参謀文書	要調査	未	未
313	-	太平洋総司令部、合同諜報センター空中写真	367枚	未	未
313	-	太平洋総司令部、第2次世界大戦潜水艦パトロール航行図	53枚	53枚	未
313	-	太平洋総司令官地対空砲用地図、1945年	53枚	未	未
319	-	軍史研究センター地図コレクション	要調査	不要 ²⁰	-
373	-	国防諜報局、空中写真、1944～45年	3806枚	3806枚	完了

4-2 利用

沖縄県公文書館ではこれら空中写真をアルバムでも閲覧に供しているが、図6にあるようにコンピューターによる閲覧システムも備えてある。このシステムでは、地図、住所、または目標物での検索ができ、見たい場所を特定した後に撮影したコース（日付）を選択して写真を表示することができる。操作はすべてがタッチパネルで、写真を拡大したり、上下左右へ移動したりもできる。また、画面をその場で印刷することもできるし、より高画質の複製が欲しければ、写真や動画フィルムと同じように、沖縄県公文書館の契約業者



図6：閲覧室内にある空中写真閲覧システム

²⁰ 「不要」となっているものは、米軍出版物の挿絵として使用された地図で、沖縄県公文書館では収集しない方針としているもの。

を通じて注文することもできる。

4-3 今後の課題

空中写真については、1945年夏ごろまでに撮影されたものはほぼ収集できているので、今後はそれ以降の写真について調査を進める必要がある。沖縄においては、特に1950年代中盤の土地闘争の頃までは、大規模な集落の移動もあり、その変遷を明らかにする資料として空中写真の持つ意義は大きい。

地図については、調査や収集が十分に進んでいない。数年前にRG77の地図の調査を手がけたことがあり、約1,000枚におよぶAMS地図を特定してあるが、この種の地図は同一タイプでも区域が違ったり、版が違ったりすると別資料として扱わなければならない、調査データの作成にかなりの時間がかかる。今後はタイプ別、区域別、版別に分けて調査結果をまとめていく必要がある。

おわりに

1997年からの駐在活動によって、映像・音声資料については約10万枚以上の写真、2,500巻の動画フィルム、3,800枚以上の空中写真、1,000枚以上の地図を発掘し、その一部はすでに沖縄県公文書館の閲覧室やホームページ等で利用に供されているが、これまでその成果をまとめる機会がなかった。本稿はその最初の試みであるが、いざ取り組んでみると、調査のノウハウや資料の概要についてどこまで細かく言及すればよいか迷うことがあり、あらためて「資料地図」作成の難しさを痛感した。しかし、これはあくまでも最初の第一歩であり、今後、新たな情報を加えたり、本稿の内容に対する読者からのフィードバックを参考にしながら、より良い「資料地図」作成へ向けて努力していきたいと考えている。